

尾道の歴史と遺跡

原始～古代編



2008

尾道市教育委員会



尾道の歴史と遺跡

- 原始～古代編 -

発行日 平成20年3月31日

編集・発行 尾道市教育委員会

〒722-8501 広島県尾道市久保一丁目15番1号

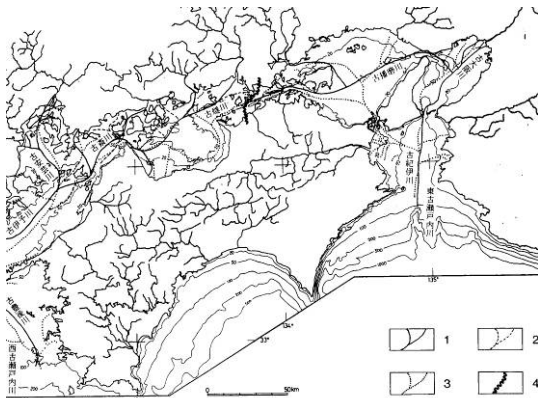
TEL (0848)25-7367

印刷 株式会社 はと印刷

旧石器時代の瀬戸内海と人々の生活

1 2万年前は陸地だった瀬戸内海

今から約1万3000年前より以前の時代を旧石器時代と呼んでいます。この頃の地球は寒冷期で、現在より海水面が低く、海岸線も異なっていたと考えられています。第1図は、瀬戸内海の海底地形を表していて、旧石器時代の瀬戸内海は谷や川となっています。海岸線も高知県より南側にあったと考えられます。



第2図 瀬戸内海の古地形
(堀 信行 1986より引用)

そして、現在の向島や因島、生口島は、2万年前には高い丘陵地帯であり、その間には図のような谷や川が存在していました。このように、現在よりも平地が多く、川が流れていた瀬戸内海地域には、ナウマンゾウやシカといった動物、木の実や果物などの植物があり、当時の人々にとって、生活しやすい場所であったようです。特に大型獣であるナウマンゾウは、人類にとって貴重な捕獲対象であり、その肉は食用として、皮は衣類として、骨や牙は生活道具として使われていました。

ナウマンゾウがいた証拠に、現在でも瀬戸内海の海底からは、ナウマンゾウの化石が引き上げられることがあります。写真1の化石はナウマンゾウの牙と臼歯で、大崎下島沖から発見されたものです。この他にも浦崎町や因島の沖合いでも発見されていて、尾道市内の地域にもナウマンゾウがいたことが推定されます。とすると、現在市内には旧石器時代遺跡は確認されていませんが、今後は発見されることも十分考えられます。

遺跡が存在しそうな場所は、2万年前には見晴らしが良く、獲物になりそうな動物を確認できる場所です。それは、現在では海に面した岬や半島の先端付近であり、村上水軍の城跡となっている場所などが可能性として考えられます。石器などが落ちていないか、ぜひ探してみてください。



写真1 ナウマンゾウの牙と臼歯

2 旧石器時代の生活と道具

旧石器時代は、まだ土器を作らない時代で、動物や魚を狩猟したり、果物や木の実などの植物を採集していたと考えられています。動物などを狩猟する道具には下の写真のような石器が使われました。

<必殺の武器 槍先形尖頭器>

左端の先端が尖った葉状の大型石器は槍先形尖頭器やりさきがたせんとうきとって、その名の通り、木の柄の先端に固定され、槍として使用されました。先端部は使用によって、折れることもあり、破損箇所を修復して再利用されることもあったようです。

<現代のナイフより良く切れる ナイフ形石器>

その右側にある小さい石器は、ナイフ形石器とって、手に持って肉を切ったり、槍として使用されたと考えられています。様々な形があり、葉状、三角形、台形、四角形などが見られ、大きさも2～3cmから10cm以上のものまであります。この石器には、ナイフのように鋭い刃がついており、1万年以上、土に埋まっていたとは信じられないほどの切れ味を持つものもあります。



写真2 広島県廿日市市冠遺跡群の主要石器
(写真提供：財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室)

この他に、スクレイパーやドリル、石斧さいせきじん、細石刃などの石器があります。石器の形や大きさなどからそれぞれ用途が推定されていて、スクレイパーは動物の皮をなめす道具、ドリルは骨や木などの加工道具、石斧は木を切ったり、土を掘ったりする道具と考えられています。細石刃は組み合わせ道具で、骨や木にはめこんで使用し、破損してもすぐ付け替えられるようになっています。これらの石器は、その用途に合わせて作られており、時代や地域によって、作り方や形、材質が変化します。

<石器の年代を決めるのは火山灰>

石器がいつ頃のものを判断するには、形や大きさも重要ですが、特に重要なことは、出土した土層の位置です。旧石器時代遺跡の場合、年代を決める要素として、火山灰降下層があります。火山灰は火山が噴火することにより、広域に広がり降下します。その火山灰降下層を基準として、広い地域の旧石器時代遺跡を比較することができるのです。有名な火山灰として、鹿児島県始良カルデラの噴火により噴出した「始良丹沢火山灰」あいら たんざわがあり、その噴出年代は約25000年前と考えられています。

縄文時代のタイムカプセル

<広島県史跡 大田貝塚>

尾道市高須町にある大田貝塚は、縄文時代中期～後期の貝塚です。貝塚とは、縄文時代の人々が食べた貝類や魚、動植物の残骸を海岸などに廃棄した、いわゆるゴミ捨て場で、貝類のカルシウム成分が地中に入ることにより、中和され、有機物が非常に良好な状態で残っています。

大田貝塚からも、たくさんの縄文土器や石器、動物・魚の骨、貝類が出土しています。写真の土器は、縄文時代中期（約 5000 年前）の土器で、食物や水の煮沸に使用された

と考えられる^{ふかばち}深鉢です。この他に矢の先端に使用された^{せきぞく}石鏃や皮をなめす道具として使

用されたスクレイパー、食物を磨りつぶす^{すりいし}磨石と石皿などの石器や、動物の骨を利用し

た^{こっかくき}骨角器などが出土しています。また、貝類も多数出土していますが、時代が特定できないものも多く、縄文時代の食文化については、今後も詳細な分析が必要です。さらに、大田貝塚の大きな特徴として、大正時代の発掘調査で、約 70 体の人骨が発見されています。縄文時代の貝塚からは、人骨が出土することが多く、これらが縄文時代の人骨とすれば、日本全国でも有数の大型貝塚となります。人骨については、今後科学的な分析を行い、大田貝塚の研究を進めていく予定です。



写真3 大田貝塚から出土した縄文土器



写真4 大浜広畠遺跡出土縄文土器、土製品

<尾道市史跡 大浜広畠遺跡>

大田貝塚の他に、御調町^{そがわ}曾川 1 号遺跡や高須町^{てんまばら}天満原遺跡、尾道市史跡 因島大浜町

^{おおはまひろはた}大浜広畠遺跡からは、縄文土器片などが出土しています。大浜広畠遺跡からは、縄文時代後期～晩期の土器片や土製品、石器が見つかっていて、縄文時代の集落があると考えられます。

弥生時代の集落とまつり

1 弥生時代の集落

弥生時代は、定住と稲作の時代です。市内でも集落遺跡が多数見つかっていて、御調町高尾2号遺跡のような丘陵上の高地性集落や、御調町曾川1号遺跡（写真5）、木ノ庄町市原2号遺跡、高須町天満原遺跡、瀬戸田町神峠遺跡などの低地性集落があります。集落遺跡は、人々が生活していた場所であり、竪穴住居跡や倉庫の跡、地面に掘られた貯蔵用の穴などが発見されています。中には写真6のように、同じ場所に何度も作り直された痕跡をもつ竪穴住居跡もあり、定住していた証拠でもあります。

尾道市内にある弥生集落は、写真5のような河川に近く、丘陵から派生した緩やかな斜面地に造られることが多く、当時の人々が水と、住居や水田に必要な平地を求めていたことが分かります。

弥生集落からは写真6のような竪穴住居跡が多数発見されることがあります。この竪穴住居跡は、円形に地面を掘った周囲に排水用の溝を掘り、2～10本の柱を建てる穴が掘られています。柱に使用された木材や屋根に使われた茅などの植物は、酸性土壌のため、溶けてなくなっていますが、写真のような地面に残る痕跡で、人々が生活していた住居跡が確認できます。このように地面を掘ることで、住居の中の温度は一定に保ちやすく、生活に適したものとなります。

この他に土器に食物を入れて貯蔵しておく穴もよく見られます。写真7は曾川1号遺跡で見つかった貯蔵穴で、弥生土器が多数出土しました。

このように、弥生時代の人々は定住に適した場所で、竪穴住居を作り、稲作などの農耕生活を送っていたようです。そして、複数の竪穴住居が集まってムラとなり、近隣のムラと様々な交流をしながら、徐々に大きく発展したのでしょう。交流の証拠として、他地域の土器が発見されています。こうした物々交換などの交流により、他地域の文化も取り入れた弥生集落が生まれたのです。



写真5 御調川流域の曾川1号遺跡



写真6 何度も作り直された竪穴住居跡



写真7 貯蔵穴から出土した土器

（写真5～7提供：広島県教育事業団
埋蔵文化財調査室）

2 弥生時代の道具

弥生集落からは、たくさんの土器や石器が出土しています。弥生時代の土器には、穀物や水などを貯蔵する壺、米を炊いたり湯を沸かす甕^{かめ}、食事の時などに使用する高坏・鉢、祭祀などに使用される器台があります。また、縄文土器と同様に、時期や地域によって、様々な形や文様があり、それが土器の年代を決める大きな要素となります。写真8の土器は、浦崎町満越遺跡から出土した弥生時代前期の土器で、表面には木の葉状の文様が描かれています。また、写真9は、市原2号遺跡と天満原遺跡から出土した弥生時代中期～後期に属する土器で、前期の土器に比べて文様が簡素化され、形状も変化します。写真10は因島三庄町沖田遺跡から出土した尾道市重要文化財の高坏です。表面は丁寧に磨かれていて、口縁部には3箇所（注：原文ママ）に小穴が認められ、ひもなどがついていた可能性があります。



写真8 弥生時代前期の土器



写真9 尾道市内の弥生土器



写真10 沖田遺跡出土弥生土器高坏
(尾道市重要文化財)

弥生時代後期になると、他地域から搬入された土器が見られるようになります。写真11は、山陰地方から多く出土する土器で、備後地方在来の土器と一緒に出土していることから、交流によってもたらされた土器であると考えられます。

土器の他に、石器や金属器、木製品が使用されていましたが、酸性土壌により、石器のみが残ります。写真12は神峠遺跡から出土した石器で、特に長細い大型の石斧は、中部瀬戸内海地域特有のものであり、瀬戸田町でも出土したことは、重要な意味をもつと言えるでしょう。



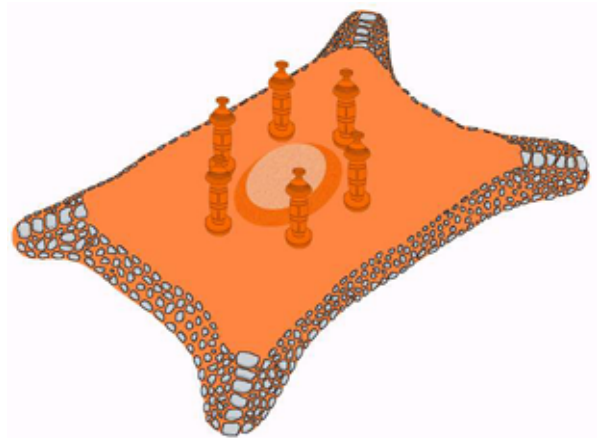
写真11 曾川1号遺跡の山陰系土器
(写真11・12提供：広島県教育事業団
埋蔵文化財調査室)



写真12 神峠遺跡出土石器

3 弥生時代のまつりと祈り

先ほど述べたように弥生土器には、様々な形をしたものがありますが、最も変わった形をしている土器が写真 13 の特殊器台です。この特殊器台は、御調町貝ヶ原遺跡から出土したもので、上部の受け台部分が破損している他は破損箇所はなく、特殊器台の分布の南西端にあたるなど重要であるとして、広島県重要文化財に指定されています。表面には、赤色顔料が塗られ、斜めの線により様々な文様が描かれ、長方形の透かし穴が彫られています。この非常に美しい土器は、第 3 図のように墓に埋葬する際の儀式や祈りに使用されたと考えられます。



第 3 図 墳丘墓と特殊器台の配置イメージ

写真 13 特殊器台（御調町貝ヶ原遺跡出土）（撮影：村上宏治氏）

弥生時代といえば、土器や石器の他に金属器が登場する時代でもあります。朝鮮半島を經由して、大陸から渡来した金属器には、青銅器と鉄器があります。青銅器には、弥生時代を代表する銅鐸や銅剣があり、島根県神庭荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡のように多



写真 14 銅剣・銅鉞（久山田町大峰山遺跡出土）
（文化庁保管）

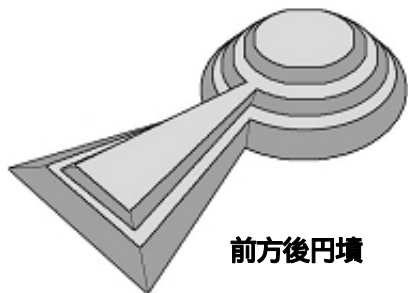
数の青銅器が出土する場合があります。尾道市内でも久山田町大峰山遺跡から弥生時代の銅剣 2 本、銅鉞 1 本が出土しています。これらは、武器ですが、大峰山の巨岩の下から発見されたため、祭祀などに使用された可能性が考えられます。この青銅器の近くからは、弥生時代後期初頭の土器も発見されており、その頃、埋納されたようです。弥生時代の尾道を物語る貴重な文化財です。

古墳のある風景

1. 権力を象徴する古墳

日本の歴史の中には、古墳と呼ばれる巨大な墓を作ることによって権力の大きさを表した時代があります。古墳は、階層差を最も象徴するものとして日本列島のほぼ全域に展開し、3世紀後半から7世紀後半の約400年も造られ続けました。この古墳によって特徴付けられる時代を「古墳時代」と言います。

400年という長い期間の中では、新しい文化の導入やそれまでの文化の衰退などを理由に、ものの考え方や生活スタイルなどが刻々と変わっていきました。文化の移り変わりを確認していくと、古墳時代は大きく前期(4世紀代)、中期(5世紀代)、後期(6世紀代)、終末期(7世紀代)と4つの時期に分けられます。



前方後円墳

前期(4世紀代)は、奈良盆地(奈良県)を中心に前方後円墳が造られ始め、やがて全国各地へと広まっていきました。古墳の内部には長大な竪穴式石室が設けられ、死者はここに安置されました。死者の周りには主に鏡や玉などマツリに関する副葬品が納められています。



前方後方墳

中期(5世紀代)は、河内平野(大阪府)を中心として関東や九州にも巨大な前方後円墳が出現します。前期に比べて規模は巨大化しますが、その数は減少していきます。竪穴式石室の中には、武器や武具などの軍事に関する副葬品が目立ちます。



円墳

後期(6世紀代)は、畿内地方以外ではほとんど前方後円墳が造られなくなり、円墳が多くなります。また、各地では群集墳が形成され始めます。古墳の内部にはそれまでの竪穴式石室が変わって、大陸から伝わった横穴式石室が造られるようになります。副葬品は、須恵器や馬具、農具などの実用的なものが見られます。



方墳

終末期(7世紀代)は、飛鳥時代と重なる時期ですが、いぜんとして一部の人間に対して古墳を造るという風習が残っており、古墳時代の終末期という区分としています。横穴式石室は、技術の進歩によって巨石を組み合わせたものとなり、よこぐちしきせつかく横口式石槨のように切石加工で美しく整ったものも造られるようになりました。

第4図 古墳の種類と形状

2. 古墳の形状と内部構造

古墳は、様々な施設が組み合うことによって、はじめて古墳と呼ぶことができます。

<墳丘と周濠>

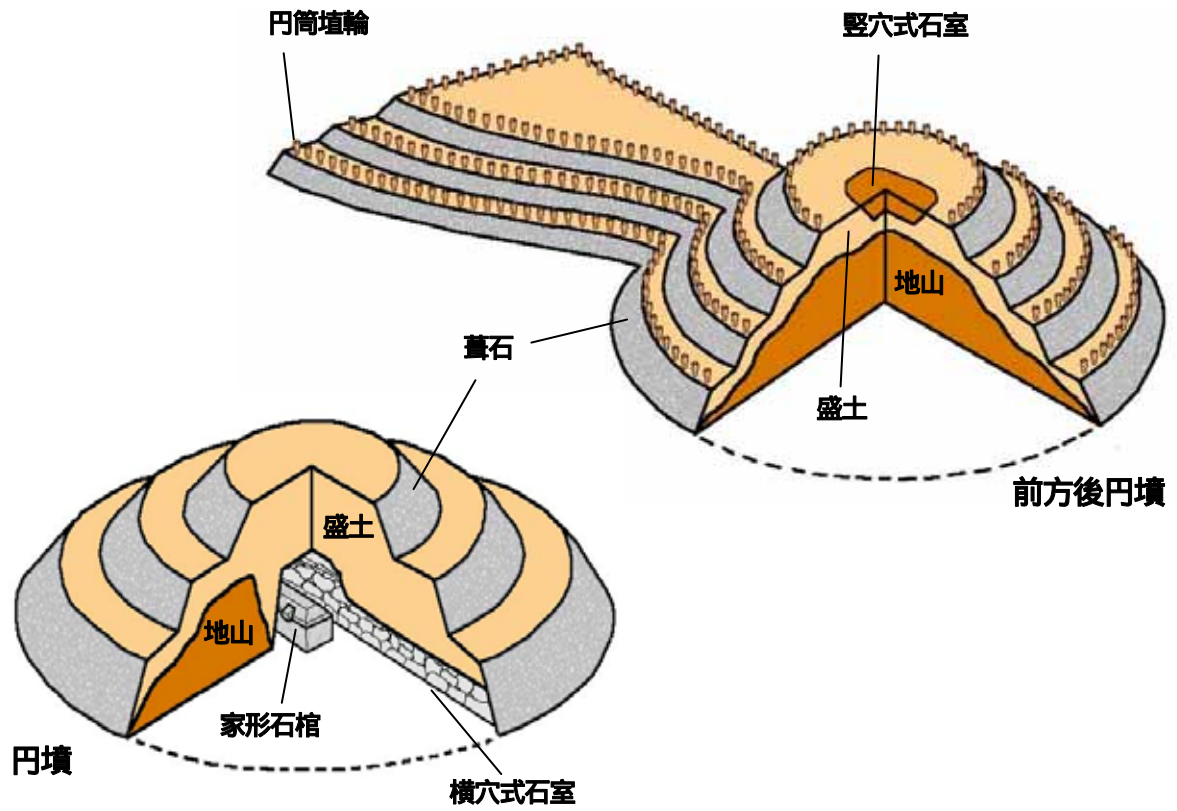
「墳丘」は、本来土を高く盛り上げて造った墓や丘という意味があります。墳丘の形状には、前方後円墳のほか、前方後方墳、帆立貝式古墳、円墳、方墳、双方中円墳、八角墳などがあります。この墳丘については、階層差によって形状が区別されていたようです。尾道では、現在までのところ、前方後円墳と円墳が確認されています。

「周濠」は、墳丘の周りに見られる堀を指します。この「周濠」の意味については、外界と聖域である古墳の境界を表現するものと考えられていますが、もともと墳丘に盛るための土を採取したくぼみであると思われます。

<葺石と埴輪>

「葺石」は、墳丘の土が流れ出さないように補強すると同時に、地肌を美しく整ったものに見せるため、墳丘の斜面に貼り付けられた石です。

「埴輪」は、古墳の「マツリ」に関係するもので、墳丘の平坦面に立て並べられました。円形の筒形をした円筒埴輪、人物・動物・家・武器や武具などの形象埴輪があります。これらは、古墳時代に使用された土器である土師器と同じ素焼きの焼物です。埴輪が立て並べられた意味については様々な説が考えられており、外界からの邪気を防ぐためであるとか、当時の葬儀を模したものなどとも言われています。



第5図 古墳の構造 (上)前方後円墳(下)円墳

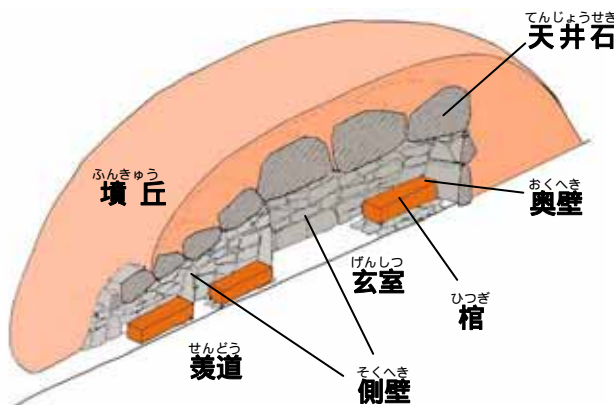
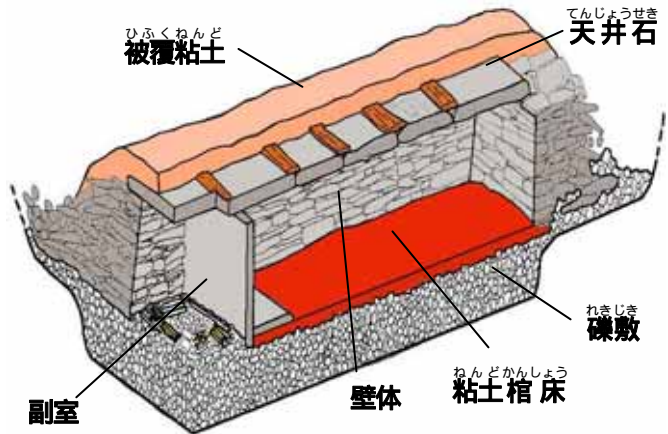
<埋葬施設>

墳丘の内部には、死者を安置するための埋葬施設が作られます。死後、古墳に葬られる人物は木棺や石棺といった棺に入れられ、室や槨などの施設に安置されることとなります。

「室」は、棺を納めるために一定の空間が確保されたもので、「槨」は棺をほぼ密封してしまう構造となっています。室や槨には、縦穴系と横穴系が存在しますが、古墳時代の前期では主に縦穴系の施設が作られ、後期には大陸から伝わった横穴系の施設へと移り変わります。

縦穴式石室のつくり方

縦穴式石室を作るために、まず墳丘の頂部に長方形の穴を掘り、その底に小石を敷きつめますが、これには水を下へと逃す排水効果があります。敷きつめられた小石の上には、棺を安定させるために粘土で床を作り、棺を置きます。石室の壁は多くの石を積み上げ、大きく平らな天井石で蓋をします。天井石の継ぎ目から土砂が入り込まないように、粘土や木材を詰め込みます。そして、さらに粘土で覆うことで完全に密封され、二度と開けられることはありません。



横穴式石室のつくり方

横穴式石室を作るために、まず石室を作ろうとする箇所の地面を平に整え、床面を作ります。そして、奥壁と側壁の最下部に石を配置し、一定の高さまで積み上げていきます。この時、積み上げた石壁のうしろ側に土を入れ込み、突き固めて安定させています。壁が出来たら、巨大な石（天井石）で天井を作り、土で覆うと横穴式石室が完成します。死者が棺に入れられ石室内に置かれた後、入口に石が積み上げられ閉鎖されます。ただし必要に応じて開封は可能です。

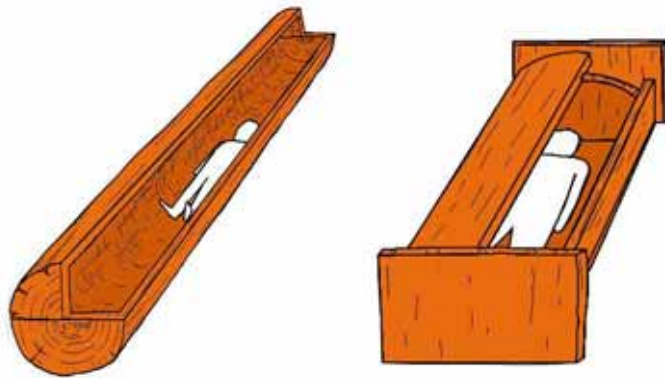
第6図 石室の構造 (『企画展示 神戸の古墳 2000 神戸市教育委員会』より抜粋し加筆)

< 縦穴系 >			< 横穴系 >	
前期 (4世紀)	中期 (5世紀)	後期 (6世紀)	終末期 (7世紀)	
縦穴式石室	_____	_____	_____	_____
粘土槨	_____	_____	_____	_____
木槨	_____	_____	_____	_____
礫槨	_____	_____	_____	_____
箱式石棺	_____	_____	_____	_____
			_____	_____
			_____	_____
			_____	_____
			_____	_____

< 棺 >

「棺」は、遺体を入れるもので、古墳時代では木や石・あるいは焼物で作られていました。製作の方法は、その材料を“**剥り抜く**”と“**組み合わせる**”の二通りがあります。また、形状も様々で、竹を割ったような割竹形や船形、長持形（長持：衣類などを保存する箱で、現代のタンスの前身）家形のものなどが存在します。

棺に使われた材料の種類にもこだわりが見られます。割竹形木棺には、水に強く腐食しにくいコウヤマキが選ばれました。石棺では、軟らかくて加工のしやすい凝灰岩が選ばれています。質の良い凝灰岩は、兵庫県高砂産の「**竜山石**」、熊本県宇土産の「**馬門石**」、大阪府・奈良県境の「**二条山白石**」などがあります。



割竹形木棺（左）と組合式木棺（右）

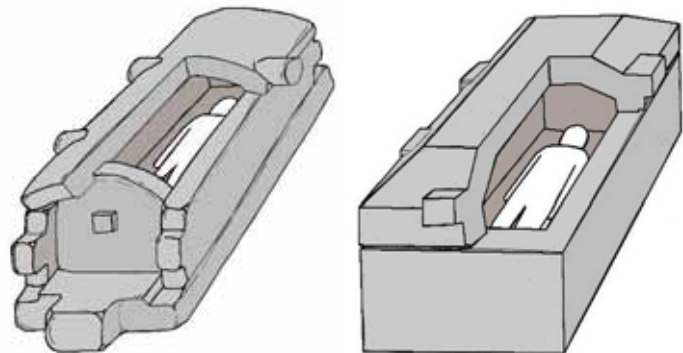
割竹形木棺は、自然の丸太材を縦に割り、中を剥り抜くことで蓋と身にしたものです。あたかも竹を割ったような形状からその名が付けられています。古い古墳からは、6~7mにも達する長大なものが作られ、中期以降は次第に縮小させたものへと移り変わります。

組合式木棺は、丸太材から底面、側面、小口面、蓋となるパーツを加工し、それを組み合わせさせたものです。

長持形石棺（左）と家形石棺（右）

長持形石棺は、底面、側面、小口面、蓋となるパーツを加工し、組み合わせさせたものです。各パーツには、持ち運びを容易にするための縄掛突起がつくり出されています。

家形石棺は、剥り抜くものと組み合わせさせたものに分けられます（右図は剥り抜いたもの）。蓋は、家の屋根の形をしているため命名されたものです。



第7図 木棺・石棺の構造（『企画展示 神戸の古墳 2000 神戸市教育委員会』より抜粋し加筆）

< 木棺 >

前期(4世紀) 中期(5世紀) 後期(6世紀) 終末期(7世紀)

割竹形木棺 _____

組合式木棺 _____

< 石棺 >

割竹形石棺 _____

舟形石棺 _____

長持形石棺 _____

家形石棺 _____

3. 尾道の王墓 古墳時代前期 / 中期

<古墳時代前期・中期の情勢>

尾道には、古墳時代前期に相当する古墳は確認されていません。しかし、浦崎町の満越遺跡では土器による塩作りが盛んに行われていたため、それを監督する人物が存在し、古墳を造ったと考えてもおかしくはありませんが、今のところ発見されておりません。

この時期、芦田川下流域を見下ろす山上に潮崎山古墳(福山市新市町)が造られており、三角縁神獸鏡という権威を象徴する器物が出土したことで知られています。この銅鏡は、畿内政権が地方の有力者と関係をつなぐために授けたものとされています。三角縁神獸鏡が与えられた古墳は数多く、しかも広範囲であることから、畿内政権が積極的に他地域とのつながりを持ち、勢力下に加えようとしていたことが分かります。

古墳時代中期に至り、尾道市内にも古墳が見られるようになります。古墳が造られたのは、主に松永湾沿岸地域で、大元山古墳、黒崎山古墳、有江古墳群、玉比売塚古墳などが確認されています。尾道市内における“古墳のある風景”の始まりです。

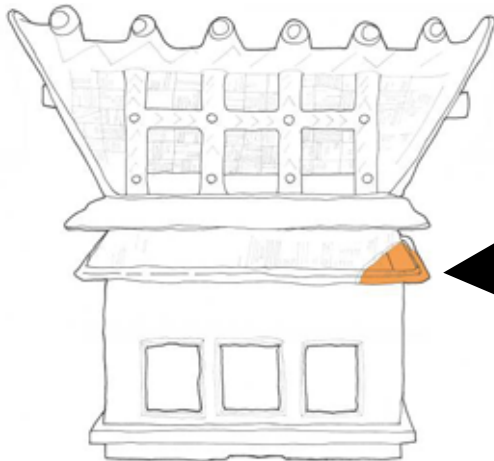
『失われたふたつの王墓』

大元山古墳と黒崎山古墳(高須町)

大元山古墳 前方後円墳(全長約50m)

黒崎山古墳 前方後円墳(全長約70m)

王墓であることを象徴する前方後円墳は、松永湾を望む高台の上に並んで造られました。これらの被葬者は、湾周辺の海上交通を支配し、松永湾沿岸部一帯で行われていた塩作りにも大きく関係していたのではないかと考えられます。備後南部地域で最大級の墳丘規模はその権力の大きさを物語っています。しかし、残念なことに、大元山古墳と黒崎山古墳は近代の開発によって多くの情報を秘めたまま破壊されてしまいました。



第8図 家形埴輪のイメージ



写真16 大元山古墳出土の家形埴輪片

『巫女の眠る墓』

玉比売塚古墳（西藤町）

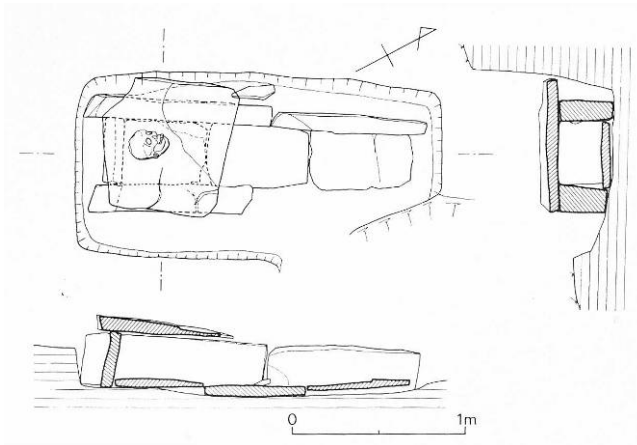
現在、西藤町を松永バイパスが東西にはしていますが、その北側の丘陵には玉比売塚古墳があります。この古墳は、箱式石棺を埋葬施設とする円墳です。石棺の内部からは、女性の人骨と勾玉や管玉などの装飾品の他、尾道市では数少ない銅鏡が出土しました。銅鏡は、直径6.4cmと非常に小型のつくりで、中国の鏡を模倣して作られた日本製の鏡です。これらの出土品は、権力者やシャーマンという神聖なお祭りをつかさどる人物の持ち物であったと考えられています。古墳が築造された時期は、埋葬施設の形態や出土品の組み合わせなどから古墳時代中期に造られたことが分かります。



写真 17 玉比売塚古墳出土の銅鏡



写真 18 玉比売塚古墳出土の勾玉と管玉



第9図 後口山古墳の箱式石棺実測図

『しゃれこうべの残る石棺』

後口山古墳（御調町）

松永湾周辺で古墳が造られ始めた古墳時代中期、御調川の流れる御調町内にも後口山古墳が造られています。この古墳は、町の中心部の小高い山の上に造られ、丁寧に作られた箱式石棺を埋葬施設とする円墳です。内部からは男性の人骨と、管玉やガラス玉が出土しました。副葬品が少ないのは、古墳時代中期の特徴と言えます。

『海上交通の監視者』

細島第1号古墳（因島重井町）

因島の北に浮かぶ小さな島にも古墳が存在しています。細島第1号古墳は、細島の南東端の丘陵上に造られた箱式石棺を埋葬施設とする円墳です。埋葬施設の形態から古墳時代中期の時期に造られたものと考えられます。立地から考えて、細島周辺の海上交通を支配していた人物が古墳に眠っていたのだと思われます。



写真 19 細島第1号古墳の箱式石棺

4. 新たな石室文化 古墳時代後期

<古墳時代後期の情勢>

古墳時代後期に入ると、尾道市内に多くの古墳が造られるようになります。この現象は他の地域においても同じことが言えますが、その原因についてはいまだはっきりとしたことが分かっていません。当時代の政治権力を大きく握っていた畿内政権の状況が変わり、墓制（墓づくりなどの制度）も変わったためとの考えが有力です。



写真 20 大想田山古墳群を東から望む



写真 21 大想田山第 1 号古墳の石室



写真 22 大想田山第 2 号古墳の石室

『文化の導入を担った一族』

大想田山古墳群（美ノ郷町）

藤井川の上流域、本郷町を望む丘陵上に大想田山古墳群は造られています。2基の円墳から構成され、いずれも尾道市内ではめずらしい埋葬施設が作られています。

第1号古墳は、第2号古墳よりも山手に造られたもので、出土した須恵器から第2号古墳より若干古いことが分かっています。埋葬施設は、一見、竪穴式石室のように見えますが、「折衷様式の石室」と呼ばれるもので、竪穴式石室の構造と横穴式石室の石材の用い方をあわせ持った石室です。周辺の地域では世羅町や東広島市などで確認されており、何らかの関係をうかがうことができます。

第2号古墳の埋葬施設は、「導入期の横穴式石室」と呼ばれるものです。尾道市内では最も古い横穴式石室の形態です。最盛期の横穴式石室は、**玄室**（棺を入れる空間）と**羨道**（**玄室**への道）の幅がほぼ同じ規模となりますが、「導入期の横穴式石室」の羨道は未発達で、細く短い形態をしています。

広島県内の多くの地域では、6世紀前半に横穴式石室が導入されたようですが、尾道市周辺ではやや遅く、6世紀後半に導入されたようです。当古墳群は、第1号古墳の竪穴系石室から第2号古墳の横穴系への移り変わりを示すものとして注目されます。



写真 23 大想田山第 2 号古墳の出土遺物

<栗原川・藤井川周辺の大型横穴式石室>

6世紀後半から7世紀前半、古墳時代も後期から終末期へと移り変わる頃に横穴式石室墳の築造が最盛期を迎えます。栗原川の流域では下組第1号古墳、小路ヶ迫古墳があり、藤井川流域では猪ノ子迫第1号古墳があります。これらは、いずれも大型に作られた横穴式石室を持つ古墳です。

横穴式石室の大型化には、集団のリーダーだけでなく、家族や親類の棺を入れる追葬のために、石室の空間を広げる必要性から生じたものです。この追葬は古墳時代後期以前には無いもので、横穴式石室の導入とともに墓制や思想などの考え方も変わっていきました。



写真24 小路ヶ迫古墳石室

『浦の有力者』

小路ヶ迫古墳（桜町小路ヶ迫）

栗原川の東側にそびえる竜王山のふもと近くに位置しています。古くに破壊され、ほこらとして祀られていましたが、発掘調査により大型の横穴式石室を埋葬施設とする円墳であることが分かりました。

横穴式石室の規模は、石室長3.9m以上、奥壁幅1.7m、高さ1.7mで、尾道市内において最大クラスに位置付けられます。石室の内部からは須恵器や鉄刀、勾玉、管玉、ガラス小玉などが出土しました。古墳の造られた時期は7世紀の前半頃と考えられます。また、9世紀後半頃の須恵器や土師器も出土したことから、古墳が何らかの形で再利用されていたのでしょう。当時は近くまで海が迫っており、海辺で営む集団の首長が小路ヶ迫古墳に葬られたのだと考えられます。



写真25 小路ヶ迫古墳の出土遺物



写真26 猪ノ子迫第1号古墳の石室

『川辺の有力者』

猪ノ子迫第1号古墳（美ノ郷町猪ノ子迫）

猪ノ子迫第1号古墳は、藤井川中流域を望む丘陵上に位置しています。一部に破壊が及んでいますが、比較的残りの良い大型の横穴式石室がぼっかりと口を開けています。

本古墳の横穴式石室は、石室長9.2m、奥壁幅1.9m、高さ1.9mで、小路ヶ迫古墳よりもやや大きく作られ、尾道市内では最大クラスのもので、石室の規模や、石材の積み方などが小路ヶ迫古墳と似ているため、7世紀前半頃に造られた古墳と考えられます。石室に用いられる石は多くが大型のもので、高度な土木技術の発達なくしては大型の横穴式石室を作ることはできなかったでしょう。

< 御調川周辺の大型横穴式石室 >

御調川流域には約 100 基もの古墳が存在しますが、その約 8 割は古墳時代後期から終末期にかけて造られたものです。そのため、御調町内には横穴式石室を埋葬施設とする古墳が数多く確認されています。それらの分布状況は地域ごとにある程度のまとまりが見られ、特に町の中心部である市・高尾地区や貝ヶ原地区に集中していました。その背景には、河川交通や陸上交通をつかさどる人物や集団の存在がうかがえます。



写真 27 大町地区から御調町中心部を遠望する

『山頂の支配者』

高尾第 4 号古墳 (御調町)

高尾第 1 号古墳は、御調町中心部と御調川流域を広く見渡せる丘陵の上に造られた古墳です。周囲には当古墳を含めて 9 基もの古墳が存在し、これらを総称して高尾古墳群と呼んでいます。

高尾第 1 号古墳は、発掘調査によって横穴式石室を埋葬施設とする円墳であることが分かりました。横穴式石室の規模は、石室長 6.1m、奥壁幅 1.3m、高さ 1.5m と比較的大きな作りです。石室の中央から須恵器が出土しており、最も古いものは 6 世紀末に位置付けられることから、古墳もその時期に造られたものであると考えられます。また、7 世紀前半や 8 世紀前半頃の須恵器もあり、追葬や古墳に関係するマツリなどが行われた可能性があります。高尾古墳群に葬られた人物達は、その立地や古墳の数から、御調町の中心地域を支配していた集団の首長であると考えられます。



写真 28 高尾第 4 号古墳の石室



写真 29 高尾第 4 号古墳の出土遺物



写真 30 蜈蚣岩山口第 1 号古墳の石室

『山麓の支配者』

蜈蚣岩山口第 1 号古墳 (御調町)

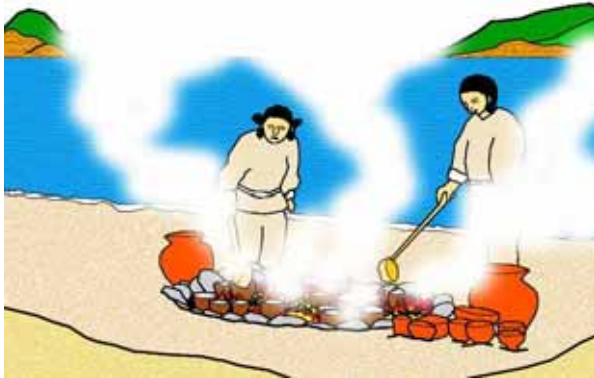
蜈蚣岩山口第 1 号古墳は、貝ヶ原地区に所在する巨石を用いて造られた横穴式石室を埋葬施設とする古墳です。石室の規模は、石室長 4.3m 以上、奥壁幅 2.4m、高さ 2.3m と尾道市内では最大、広島県内でも最大クラスです。古墳の造られた時期は、出土した須恵器により 7 世紀前半と考えられます。同じ時期に存在していた高尾古墳群、貝ヶ原古墳群との関係については、いまだ明らかになっていません。

5. 古代の塩作り 古墳時代前期～飛鳥時代

『塩作りと三大勢力』

満越遺跡（浦崎町満越）

浦崎町満越地区の南側海岸沿いに立地する、古墳時代初頭から古代（今から 1700～1300年前）までの長い期間、塩を生産していた痕跡の残る遺跡です。発掘調査の結果、塩を作るための炉跡、塩作りの際に何らかの祭りを行ったと考えられる祭祀土坑が確認されました。遺物は、製塩土器の他、畿内、吉備、山陰の特徴を持った土器が出土しています。3地域は、当時の日本列島の中で一大勢力となっており、満越遺跡からこれらの土器が出土することは、尾道周辺もその勢力の中に組み込まれていた可能性が高いと考えられます。満越遺跡での塩作りが3地域とどのように関わってくるのか、どのような人達がどのような方法で塩を作っていたのか、どこに、どうやって運んでいたのか。これらの問題を考えることは、当時の社会の仕組みを解明することにつながるため、満越遺跡はきわめて重要な遺跡と言えます。



第10図 満越遺跡の製塩風景

写真31 製塩土器の出土状況

製塩土器

満越遺跡からは多量の製塩土器が出土していますが、すべて同じ形をしているわけではありません。土器の形や厚さなどの特徴から、全部で4つのタイプに分けることができます。出土した層の上下関係（基本的に上の層が新しく、下の層が古いという考え方）や備讃瀬戸周辺に分布する製塩遺跡の調査例を踏まえると以下の様に土器の形が変化し、時期もそれぞれ異なるものと分かりました。



脚台タイプ → 無脚コップタイプ → 大型ボウルタイプ → 薄手尖底タイプ
 （古墳時代前期） （古墳時代中期中葉～後期）（古墳時代後期～飛鳥時代） （飛鳥時代～奈良時代）

古代寺院の建立

1. 古墳造りから寺造りへ 白鳳時代-

<古墳時代のその後>

弥生時代終末期から古墳時代の初頭にかけて畿内地方に誕生した大和政権は、永い年月をかけて各地の集団を支配下にしていきました。その代償として権威を象徴するモノを与え、古墳の築造を認めたのです。その結果、一般の人々と有力者の差別化がなされ、有力者の中でも位の差が生まれることとなります。古墳は、そういった権威や秩序を象徴するものとして存在し続けていました。

しかし、古墳時代後期に大陸から仏教が伝来し、大和政権によって公認されると有力者達は次々と寺院を造営していくようになります。それは、寺院が仏教文化や大陸文化によってもたらされる政治・経済・建築などの技術や知識を欲しがったためと考えられます。これにより、それまで権威や秩序の象徴であった古墳は急速に造られなくなり、代わって寺院が権威と富の象徴になったのです。

『仏教伝来の証』

本郷平麿寺（御調町）

本郷平麿寺は、御調町の西部に存在していた古代寺院であり、遠い昔に廃れてしまったようです。発掘調査の結果、建物を支えていた礎石が確認され、寺院の象徴である塔跡と仏像が安置された金堂跡であることが分かりました。この建物配置は、塔と金堂が一直線尉に並ぶ大阪市四天王寺にならった「四天王寺式」に近い形式と考えられています。また、建物跡から南の地域では、寺の境界を示す石垣が確認されました。



写真 32 塔跡の礎石群と心礎

出土遺物には、軒丸瓦など多量の瓦類、建物の壁材や地面の舗装に使われた埴せん、須恵器すえきや土師器はじき、建物に使われていたと考えられる鉄釘、仏像の頭髪らぼうである螺髪らぼうなどがあります。中でも複弁蓮華文軒丸瓦ふくべんれんげもんのかまら（右図）は、



写真 34 複弁蓮華文軒丸瓦

奈良県橿原市の石川寺から出土するものと類似しています。このことから本郷平麿寺は白鳳期（7世紀後半）頃に造られた寺であることがわかりました。また、平安時代初期頃まで寺は存続していたことも、瓦や須恵器すえき、または文献ぶんげんなどからも読み取ることができます。（



写真 33 石垣検出状況